

障害者スポーツの歴史

身近な障害者 スポーツの魅力

日本で障害者スポーツが積極的に行われるようになったのは、昭和39年のオリンピック東京大会の直後に開催された、第2回パラリンピック東京大会以降です。その時の日本選手は身体障害者更生施設の入所

者で病院の患者さん達でした。その後、病院や施設では、医学的リハビリテーション(機能回復訓練)の一環としてスポーツを取り入れられてきました。昭和40年からは、国民体育大会(秋季大会)が開催された地で身体障害者の全国スポーツ大会が開催されるようになりました。

障害者スポーツは、全国身体障害者スポーツ大会と全国的障害者スポーツ大会(ゆうあいピック)から、現在の全国障害者スポーツ大会

に続いており、それは障害のある選手が競技を通じスポーツの楽しさを体験するとともに、多くの人々が障害に対する理解を深め、障害のある人の社会参加を促進することを目的に開催される大会です。ですから、一人でも多くの身体障害者に参加機会を与えるという観点から、障害者スポーツへの登竜門といえます。記録を目指す競技者には種目別の選手権大会や、ジャパンパラリンピック大会等が開催されており、成績次第では世界大会へとつながっております。障害者スポーツは、リハビリテーションの延長という考え方から、日常生活の中で楽しみながら競技するスポーツへと広がっており、健常者のスポーツも障害者のスポーツも、ここに至って一本化してきたといえます。

障害者スポーツの工夫

「障害者スポーツ」という言い方をしますが、障害者のための特別なスポーツがあるわけではなく、障害があるためにできにく



いことを、ルールや用具を工夫することで、安全に楽しく、公平にできるようにしているものを広く「障害者スポーツ」と呼んでいます。ここでいくつかの種目を紹介します。

陸上競技 各種目は同じ程度の障がいのある人同士で競技が出来るように、障害の程度別にクラス分けがされています。障害の特性に応じた工夫をしたもの、視覚障害者には音源で方向や場所を知らせる事や、方向を誘導する伴走者と走る競技など、障害に配慮した種

目があります。

車椅子バスケットボール ルールは一般のバスケットに準じていますが、ダブルドリブルがないとか、選手には障害のレベルに応じた個人持ち点(1〜4・5点)が決まられ、試合に出ている5人の持ち点合計が14

点を超えてはいけないなどとなっています。



愛媛県障害者
スポーツ指導者協議会
会長

渡部 和典
(松山市)

障がい者にやさしいまちづくり

卓球 一般卓球とサウンドテーブル tennis (盲人卓球) があり、一般卓球は肢体不自由、聴覚障害、知的障害、視覚障害(弱視)の選手がいます。一方、サウンドテーブル tennis は空間にあるボールを打つことが困難な視覚障害者を対象にしており、ネットの下を転がしながら打ち合う競技です。

アーチエリー 肢体不自由、聴覚障害のある人の競技です。一般のアーチエリー競技規則に準じますが、弓を引くための道具を使ったり、口や義手で引くことができ、上肢の筋力の弱い人はコンパウンドボウ(弓に滑車がついている)も使えます。

車いすテニス 車いすで行うテニスで、ツীবウンドまでに返球が認められている以外はコート の広さやネットの高さ、ルールも一般のテニスと同じです。

柔道 視覚障害者による競技です。競技は障害の程度別ではなく、体重別で行われます。ルールは一般とほぼ同じですが、対戦の前に一度組み合い、相手の位置を確認した後、組手を離し「はじめ」の合図で開始します。



愛媛県の取り組み

①昭和40年の第1回全国身体障害者スポーツ大会に10名の選手を派遣してから以降毎年参加し、全国的障害者スポーツ大会も第1回から参加、平成13年に統合された全国障害者スポーツ大会にも第1回から毎年参加しています。

②昭和57年10月に愛媛県身体障害者福祉センター(A型)が全国で7番目の施設として設置され、県内の障害者スポーツの取り組みが本格化し、各種スポーツクラブが誕生しました。そこで鍛えられた選手達は、チームとして全国障害者スポーツ大会で優勝したり、個人競技ではパラリンピックや各世界大会で入賞している選手も出ています。



③平成5年に愛媛県身体障害者スポーツ協会が発足し、障害者スポーツの啓発活動や、各種競技大会の参加・協力および支援を行っています。平成8年には愛媛県障害者スポーツ指導者協議会が発足し、全国障害者スポーツ大会に監督・コーチの派遣や県障害者スポーツ大会を主管しており、地域の障害者スポーツの振興を支えています。

今後の展望

平成29年に全国障害者スポーツ大会が愛媛県で開催されます。今後の取り組みとしては、団体競技に出場できるチームは、開催と全国8ブロックの優勝チームとなっているので、県内にチームのない種目の団体のチームづくりを行うことと、現在活動しているチーム及び個人選手の強化、審判員の養成、より専門性の高い中級障害者スポーツ指導員養成、ボランティア養成(手話通訳、要約筆記、点訳、大会サポート等)、その他様々な問題をクリアして、大会を成功させたいと思っています。

まとめ

本年8月から韓国・大邱で開催された世界陸上男子400mに両足が義足の選手が初めて出場し、準決勝にまで進む活躍をしました。レース前に「この舞台に立つことで、健常者と障害者スポーツの融合の象徴となれることを誇りに思う」と話していました。当然義足ができるまでの過程も大変ですが、参加標準記録を上回り、出場するまでの努力は並大抵のものではなかったと思います。

障害のある競技者が勝利のために努力する姿は、障害のない競技者となら変わるものではないと思います。スポーツの世界にもノーマライゼーション(注)の理念が浸透することを願っています。

(注) 障害者を特別扱いせず、健常者と社会生活を共にするのが当たり前という考え方。